

- Vendryes : Sur l'emploi de l'auxiliaire «avoir»  
pour marquer le passé. (choix d'études  
Linguistiques et celtiques.)
- Curme, G.O. : Syntax.
- Kruisinga : Handbook of English Grammar.
- Poutsma, H : A. grammar of Late Modern English (part II  
sec 2)
- Jespersen, Otto: M.E.G. part IV. syntax.
- ” The Philosophy of Grammar
- 半田一郎 訳 : 文法の原理 (岩波書店)
- Charleston, B.M. Studies on the Syntax of the English Verb
- 中川清 訳 : 英語動詞のシンタクスの研究 (英語学ライブラリー)
- Bryan, The Preterite and the Perfect Tense in  
Present-day
- 中条和夫 訳 : 現代英語の過去と完了 (英語学ライブラリー)
- 中島文雄 : English 文法の原理 — 意味論的研究 — (研究社)
- 大塚高信 : 英文法論考 — 批判と実践 — (研究社)
- 太田朗 : 完了形・進行形
- 福村虎次郎 : 時制と態 (英文法シリーズ 11)
- Text-Bronte E.: Wuthering Heights.
- Woolf, V. : To Light House

(文責 山本美代子)

## 堀辰雄の文体について

三村佳代子

はしがき……人が文学者やその作品に迫る場合には、いろいろな方法や立場があるであろう。ここでは文体論という方向から、堀辰雄に接してみることにした。文体論はその基盤のちがいに、(1)心理学的文体論、(2)美学的文体論、(3)語学的文体論の三つの立場に分類できるが、その(3)に基き心理学的な方法を伴って論を進めてゆこうと思う。

本論……文体を調べるのに取り上げたのは、(a)初期のもの…ルウベンスの偽画、聖家族、(b)ロマン…風立ちぬ、菜穂子、(c)旅に取材したもの…樹下、霧の上にて、浄瑠璃寺の春、(d)日本の古典に取材したもの…かげろふの日記、娼捨、曠野、の十の作品である。これらの作品の調査は、1.文の長さ、2.文章の構成、3.品詞、を中心として行うことにした。

文長の項では、(a)字数法と文節法、(b)辰雄の文長、(c)字数法と文節法の比較、(d)辰雄と他の作家との文長比較について論じられている。文章構成の項では、堀辰雄の文体における、(a)短文の存在、(b)文のおだやかさ、(c)倒置法、挿入法に言及されている。品詞の項では千字の間にある品詞について、他作家の作品とともに調査されており、さらに堀辰雄一人に焦点をしばって作品比較がなされる。

堀辰雄の文は、さまざまな危険をはらんでいる。一歩あやまれば冗長だとしか許されない文になる。主述のあいまいな文だとも言われかねない。しかし、長い文の中に、倒置、挿入、指示語といった種々の技巧を取り入れながら、そういった危険から脱しきったところに、堀辰雄の文体としての特徴があり、堀辰雄独自の世界が存在すると言えるのかもしれない。

むすび……「文体について」と題したが、その全部はとても消化しきれなかった。いくつもの操作とは無縁の如く、作品の持つ余情は、神秘性はそのヴェールを脱ごうとしない。  
今後の課題として、これからも取りくんでゆきたいと思っている。

#### 参考文献

「国語文体論序説」桑門俊成 誠信書房

「文章心理学入門」波多野完治 新潮社

「文章心理学」＜新稿＞波多野完治 大日本図書

「ことばと文章の心理学」波多野完治 新潮社

「文章心理学入門」安本美典 誠信書房

「小説の文体」東田千秋

「文体論の領域」西尾光雄

「文体研究に必要な統計の考え方」樺島忠夫

「国語教育と文体」増渕恒吉

(以上、「文体論入門」日本文体論協会編 三省堂)

「新文章読本」川端康成 角川文庫

「文章工学」樺島忠夫 三省堂

「近代作家の文体の展望」岡村和江(「講座“現代語”第五巻“文章と文体”」時枝誠記・遠藤嘉基、監修、明治書院)

「近代文学鑑賞講座第十四巻“堀辰雄”」中村真一郎編 角川書店

「現代作家論全集九“堀辰雄”」佐々木甚一・谷田昌平 五月書房

「堀辰雄」（「現代のエスプリ」）佐々木甚一編 至文堂

「堀辰雄読本」（“文芸”臨時増刊）巖谷大四編 河出書房

「堀辰雄全集」全十巻 角川書店

「風立ちぬ・美しい村」 新潮社

「幼年時代・晩夏」 新潮社

「菜穂子・楡の家」 新潮社

「堀辰雄 妻への手紙」 堀多恵子編 新潮社

「花あしび」 青磁社

「風立ちぬ・聖家族」 旺文社

「堀辰雄」（「日本の文学」42） 中央公論社

「志賀直哉」（「日本の文学」21・22） 中央公論社

「谷崎潤一郎」（「日本の文学」23・24・25） 中央公論社

「川端康成」（「日本の文学」38） 中央公論社

「佐藤春夫」（「日本の文学」31） 中央公論社

文責 （屋敷睦美）

## フランス語に於ける否定表現について

村 上 勝 也

現代フランス語に於ける最も *ordinaire* な否定形式は *«ne……pas»* である。この「二辞頃」による否定表現形式は、印欧語族に属する他の諸言語と比較してみると直ちにその特異性に気付く、しかしながら、これと同時に、「*ne* 単独否定」、「*pas* 単独否定」も存在し、更に、意味的明確性が求められる時には、他の「半否定辞」とも容易に *«ne»* は結び付き、その否定辞としての機能を果し得る。これら諸々の「分離」と「結合」の *mecanisme* を、第一章では主として歴史的に、第二章では現代フランス語の否定表現形式を *discordantiel* と *forclusive* の立場から分析検討することによって、この言語に独特の否定表現の *nuance* を明らかにし、最終的には「虚辞否定の *ne*」の考察に及ぶ。